

# 挑戦者たち

## きよろうの

Vol.38

にしほりこうたろう  
 西堀耕太郎さん

1974年、和歌山県生まれ。カナダ留学後、市役所勤務。2004年、29歳で妻の実家である、創業から160年の和傘の老舗・日吉屋を継ぎ5代目となる。その後「伝統は革新の連続」を企業理念とし、和傘の伝統技術を生かした照明器具など新商品を開発、「グローバル老舗ベンチャー企業」を目指す。2008年より海外進出し、現在15か国で展開中。2012年より、日吉屋での経験とネットワークを利用して、日本の伝統工芸の商品開発や販路開拓を支援するTCI研究所（現：日吉屋クラフトラボ）を設立、代表としてさまざまな活動を展開している。



培われた伝統の継承と、  
 時代に合わせる変化。  
 この2つが両輪となり  
 次世代に伝統となるものを  
 創出します。

### 京和傘から全国の伝統工芸へ 現代のニーズに寄り添い新たな伝統を生み出す

今や時代行列や屋外イベントで目にするだけになった、和傘。京都市内にかつて250軒以上あった和傘屋も、現在残るのは1軒。それが京和傘の老舗、日吉屋だ。5代目の西堀耕太郎さんは「伝統工芸の技術を応用して、新しく伝統となるものになげたい」と、京和傘の仕組みを活かし、ランプシェードを開発。注目を浴び、今では海外に展開をするまでになった。

きっかけは、西堀さん独自の「気づき」からだ。京和傘を日光にかざして点検しているとき、和紙を透過するやわらかい日差しが美しかった。これは照明器具になる、と思いました。

西堀さんは和歌山県出身。カナダ留学経験もあつたことから、京都市人が当たり前に思う光景を「外の目」で見ることができた。それが、衰微する伝統工芸を起死回生につなげたとも言える。「後に伝統となるものも、当時

はその時代のニーズに添えてきた新作。良いものなら広まり、長く使われ、伝統になるんです。この発想を西堀さんは「伝統は革新の連続」と言い、モットーにする。魔除け、庶民の雨具と、時代に応じて革新され続けてきた和傘だが、現代人は「機能を越えた情緒的な美」に惹かれていくそう。だからこそ、様々な素材や色柄のコラボ商品や、照明などの新商品を世に送り出す。

京和傘同様に、素晴らしい伝統工芸が日本の各地に残っている。「それらを応用すれば、現代のライフスタイルに合うものができるはず」。そう考えた西堀さんは、2012年に日本の伝統工芸を支援する研究所を設立。扇子からルームディフューザーを開発するなど、多くのプロジェクトがスタートした。「職人が紡ぐ伝統工芸の素晴らしさを世界中の人々に感じてほしい」。西堀さんはまさに次の伝統を生み出す挑戦をしている。



写真上/夏にしか出番のない扇子。扇骨の素材が竹であることから、水分を吸う特徴を活かし、アロマオイルを吸い上げるスティックとして取り入れ、ディフューザーに。西堀さんは、伝統工芸品ごとの特質を見つけ出すことに関わり、新たな可能性に挑戦している。

写真右/和傘を逆にした形のランプシェード「古都里」。竹骨の幾何学的ともいえるフォルムと和紙の透過光は、スタイリッシュな照明となつて部屋を飾る。また、開閉する傘の機能に応用したペンダント型や床置も人気だ。



### 私も挑戦者です

「伝統は革新の連続」をモットーに、新たな伝統を生み出すことに挑戦する西堀さんと同様に、三洋化成も化学のちからで化学の枠を越えてイノベーションを起こし、持続可能な社会づくりに挑戦しています。

三洋化成工業株式会社

◎京都市東山区一橋野本町11-1  
 もよりバス停は「泉涌寺道」

三洋化成 Twitter  
 @sanyochemical